**弱者は切り捨て、戦中の隠蔽体質　「泥船」7年8カ月　作家・中島京子さん**

5時間前

中島京子さん＝東京都文京区で2018年5月22日、根岸基弘撮影

　特定秘密保護法や安全保障関連法、森友文書改ざん……。戦前・戦中の庶民の暮らしを描いた「小さいおうち」で知られる直木賞作家、中島京子さん（56）は、第2次安倍政権下で多くの問題が指摘されながらも強行採決された法案や数々の不祥事に対し、国会前のデモに参加して抗議の声を上げてきた。中島さんが「泥船」と表現した長期政権が醸し出した時代の空気とは――。【牧野宏美/統合デジタル取材センター】

◇極めて「安倍政権的」な幕切れ

　――毎日新聞のコラム「時代の風」では、安倍政権下の国民は「泥船に乗っている」が、「船長（安倍晋三首相）はしぶとい」と書きました。安倍首相の辞任表明をどう見ますか。

　◆思っていたよりあっけないというか、えっという終わり方でした。ただ、この政権では、終わる理由として、体調の問題か任期満了しか選択肢はなかったと思っています。というのも、森友、加計問題や桜を見る会など、過去の政権なら首相が責任を取って辞めていたであろう局面は何度もあったのに、絶対に辞めなかったからです。常識ではあり得ないレベルの「辞めない」方針を貫くことで、長期政権になったのです。今回、検察庁法改正案がツイッターデモで廃案に追い込まれ、「アベノマスク」など新型コロナウイルス対策が国民の怒りを買うなどし、実際支持率が低下していました。事実上、追い詰められて辞めたように見えますが、病気が理由と言われると、多くの人はそれ以上突っ込みづらい。これまで同様、責任があいまいにごまかされており、極めて「安倍政権的」な幕切れと考えます。

◇「権力は絶対腐敗する」体現

　――7年8カ月を振り返って、特に印象に残ったことは何ですか。

　◆具体的な政策や不祥事はひどいことがいくつもあり、一つに絞るのが難しいですね。全体としては、民主主義やそれを担保するための手続きを無視したり壊したりしたことによって、政治や行政に対する信頼を失墜させたという印象があります。「権力の私物化」という言葉が一番分かりやすいでしょう。権力者である安倍さんはいろいろなことを教えてくれました。例えば、「権力は絶対に腐敗するものだ」ということ。一般論としては知っていましたが、安倍さん周辺の「疑惑」を見ていると、お友達を大事にし、周囲もその関係を忖度（そんたく）して優遇し、ということを経て腐敗していく様子がとてもよく理解できました。

　そんな中で、胸に刺さった矢のように忘れられない存在が、近畿財務局職員の赤木俊夫さんとジャーナリストの伊藤詩織さんです。赤木さんは森友問題の際、安倍さんを守るためだけに上司の指示で文書の改ざんに手を染め、それを苦に自殺した。伊藤さんは、安倍さんと親しいジャーナリストから性的暴行を受けたとして刑事告訴しました。ジャーナリストは不起訴になりましたが、警察のトップが逮捕を止めたとの疑惑が報じられています。民事訴訟（1審判決）では伊藤さんの訴えが全面的に認められたものの、伊藤さんは今もバッシングを受けています。私物化によって、弱い立場の人が切り捨てられる、それどころか攻撃される象徴的なケースだと思います。

◇平和主義、民主主義壊れる

　――こうした安倍政権の特徴は、社会にどんな影響を与えたのでしょうか。

　◆第1次安倍政権では教育基本法が改正され、「愛国心」や「道徳」がさかんに叫ばれていました。その政権が終わった時、息苦しかった空気がちょっと変わり、ほっと息をつけるような感覚になったのを覚えています。では第2次安倍政権はどうか。私は世の中の空気は一層悪くなったと思っています。

　赤木さんたちの例もそうですが、沖縄県の米軍基地問題や貧困問題、新型コロナの対策でも、弱者への共感や弱者を守ろうという姿勢が欠けていると感じてきました。それが差別や弱者を攻撃する空気を生み、助長していったのではないかと思っています。この間、障害者が犠牲になる痛ましい事件が起き、「愛国」を掲げる右派のヘイトスピーチが横行しましたが、そうした空気と決して無関係ではないでしょう。

　――安全保障関連法に反対した理由は何ですか。

　◆法ができれば、米国との関係の中で、主体性なく戦争に巻き込まれていく事態が現実に起こりうると思ったからです。戦後、日本が憲法で守ってきた平和主義という大事なものが壊れ、たがが外れていってしまうように感じました。

　さらに、法案審議が民主主義のプロセスを全部ないがしろにして進んでいくことへの恐怖心がすごく大きかった。私は憲法を変えたくない気持ちはあるが、変えたい人もいて、その人たちの考えも分かる。立場の違いを超えて、正面から理性的に議論を重ねるべきなのに、閣議決定で一方的に憲法解釈を変え、法案を強行採決しました。これを許したら民主国家ではなくなってしまいます。同様に、特定秘密保護法や「共謀罪」法も内容、プロセスともに非常に問題が多いです。

　――「小さいおうち」には、戦前のモダンでおしゃれな生活とともに、開戦や戦勝のニュースに沸く庶民の姿も描かれています。中島さんは、文庫本収録の対談で「調べていくうちに、みんな私たちと同じように楽しく暮らしていたのに、いつのまにか戦争に向かっていったんだとわかった。今の私たちも、いつでもああなる危険性がある」と語っています。

　◆「いつのまにか戦争に向かっていた」の本質的な問題は、なぜみんなが気付かなかったのかということです。政府は国民に対して情報を知らせなかったばかりか、戦況について劣勢なのに勝ったとうそを伝えたり、別の出来事を強調して目をそらそうとしたりしていました。メディアも政府にコントロールされ、言われるままに報道していました。

　過去を知り、向き合うことは大切です。あの当時と同じような空気が醸成されれば、人々は同じ行動を取る可能性がある。あの小説に取り組み、それは自戒しなければという気持ちが生まれました。

　だからこそ安保法制などに反対の声を上げてきたし、その危機感は、今も強いです。安倍政権の隠蔽（いんぺい）体質が当時と似ているように思うからです。記録を残さない、文書を改ざんする、文書を出したとしてもほとんど黒塗り。国民が知りたい、必要な情報をなるべく知らせないようにしているように見える。それにメディアも締め付けられて本当に正確なことを伝えているのか信じられない部分がある。

　――「菅（義偉）首相」が有力視されていますが、次期政権への注文はありますか。

　◆安倍政権を支えた官房長官が首相になるのであれば、民主主義を軽視するこれまでの「安倍的」な手法が踏襲されるわけで、安倍政権は終わっていないのと同じでしょう。それならば、私たちは、一刻も早くまともな政権に変えなければならないと思います。史上最長政権の後は、史上最短政権で終わってもらいたいです。

◇なかじま・きょうこ

　1964年東京都生まれ。2003年「FUTON」で小説家デビュー。10年「小さいおうち」で直木賞、15年「長いお別れ」で中央公論文芸賞を受賞。16～18年、毎日新聞でコラム「時代の風」を担当した。